

軽井沢へ (4)奈良井宿のマリア地蔵を見て

奈良井宿で見てごらんと勧められたのが「マリア地蔵」です。奈良井宿の観光ガイドブックによれば、「昭和の初め、住民によって近隣の藪の中から発見されました。隠れキリシタンが密かに祈るために作ったものともいわれています」と説明されていました。大宝寺の片隅に大切に保存されています。



1m くらいの座像ですが、首がないのはなぜ？ 胸の子どもが持つ十字の変形のような宝珠は何？ という疑問がキリシタン弾圧、隠れキリシタンを思い起こさせて、「マリア地蔵」と命名されたのでしょうか。奈良井宿にはほかにキリシタンに関する資料はないようです。

マリア「観音」は隠れキリシタンが観音像や中国伝来の慈母観音を偽装のために用いたようで、澤田美喜記念館（隠れキリシタン資料館）で見ました。仏像を拝むのが当然な日本の宗教環境でしたから、キリシタンも同じように御像に依存したのでしょうか。私は軽井沢への旅に加賀乙彦著「高山右近」を持参し、難しい漢字に苦労しながら読んでいたので、右近の「霊」がマリア像に出会わせたのかしら？ などと誤ってしまいました。

結城了悟著の「キリシタンになった大名」に記されていた高山右近（1552－1615）の年表を読んでいるうちに、右近の信仰の姿が想像され、感動を覚えました。右近の信仰をさらに知りたいと思い加賀乙彦著「高山右近」を読みました。本は、時、追放直前のクリスマス、場所、金沢に設定し、金沢の教会の司祭クレメンテの書簡が狂言回しとなって、右近の追放の旅と死までを描いています。厳しい寒さの北陸の冬、キリスト教にとって緊迫した時代、「どこか清しの病」と評されたほどの右近の清廉、潔癖、真剣な信仰生活を描いていますので、非常に清潔感のある作品でした。

仏教に熱心だった右近の父が司祭を招いて話を聞き、真に従うべき方として、キリストを信じるようになりました。12歳の右近も同時に洗礼を受けました。戦に次ぐ戦、人質として敵方へ、仕える主の裏切り、など続く時代に、右近が願ったことは無私の愛に生きたキリストにのみ従い、心の自由を得ることでした。武力による解決ではなく、忍耐し受容する道でした。真の主に従うために命を捧げるのは武将として当然の道でした。愛し合い、信じあう人間関係に目覚め、多くの人々に積極的に伝道したのです。

慶長19年（1614）の禁制により、外国人司祭たちは海外追放、日本人は棄教、改宗を迫られました。武将として勇敢に戦い、茶の湯の嗜みも優雅で、愛情あふれ、倫理観の高い人物である右近を、全ての人が尊敬し、惜しみます。けれども、右近は追放の命に従います。右近と共に、金沢の教会で伝道していたクレメンテ司祭たちが先立って捕縛され、真冬の北国街道を京へ、長崎へと追われていきました。長崎でクレメンテ司祭は布教のため、地下に潜伏していきます。右近たちはマニラへ護送されます。



マドンナ 伝高山右近作
(澤田美貴記念館蔵)

この時代、主従の厳しい関係に生きた武家の人々の潔さには驚かされます。災いが友人、家臣、信徒に及ばないように、全ての関係書類を焼き捨てるよう命じ、迫害を逃れられるように道を示しながら、自分自身は静かで穏やかに殉教を受け入れているのです。「右近殿はよく茶室にひきこもり、床間に御像を置き、長い時間を祈りに捧げていた」と言われています。右近の心の平安は「主が見守っているのにほかに何を求めようか」という、キリストと共に歩んでいる祈りの日常から与えられたものでしょう。

「高山右近」を読み終えました。素晴らしい人物像でした。加賀乙彦氏の「神のあやつる運命の糸は幾重にも不思議な絡み方をする」という言葉にも魅了されました。神の守りを信じて、命の危険、逆境、迫害、苦悩という受け入れがたい苦難を試練として忍耐する時、新しい命へと導かれていくのでしょうか。